
Last Letter ~ 花言葉の物語 ~

十六夜 あやめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Letter ～花言葉の物語～

【Nコード】

N5953M

【作者名】

十六夜 あやめ

【あらすじ】

当時小学5年生の茅紘ちひろは中学1年生の拓磨たくまに手紙を書いた。それから、彼らの物語は始まった。

この物語は本当の話を目材に、オリジナルを混ぜて作ってあります。

第1話 スノードロップ（前書き）

スノードロップ 花言葉は希望・慰め・恋の最初のまなざし。

第1話 スノードロップ

はがききたくま
羽賀崎拓磨さまへ

たいへんご無沙汰ぶさたしております。お元気ですか？

こちら（埼玉県）の初夏も暑いけれど、長野県に比べれば、ずっと過ごしやすいです。電車の中の冷房や、寒すぎるくらいのデパートのおかげです。真夏はそちらとは比べ物にもならないくらい気温が上がります。

溶けてしまいそうな熱いアスファルトも、地表近くの陽炎かげろふも、わたしにはちよつと辛いです。

今年の夏休みはそちらに行けそうです。果てしなく続く高い空も、虫の音や鳥のさえずりも、大きな木陰も、わたしは大好きです。だから早く夏休みにならないかなって、毎日カレンダーを確認しています。

腰くらいまでであった長い髪も耳がでるほど短くなったから、会ってもたぶんわからないだろうね。

わたしたちが初めて出会ったのは、まだわたしが小学四年生の頃で、拓磨くんは六年生だったよね。

いちめんの雪に覆われた広い田園と、永遠に降り続ける雪は、まるで絵に描いたような冬の一場面のようにでした。

あれからもう一年と四ヶ月が経ちました。

ねえ、拓磨くん。わたしのこと、覚えていますか？

彼女からの手紙は妙に大人びていて、合間あいまに描かれているイラストが可愛くて（セミとか雲とか鳥とか絵文字とか）、それはそのまま、少女の彼女が大人になっていく姿を彼に想像させた。

女の子特有の丸い文字で綴られた手紙は彼を笑顔にした。

初めての手紙を何度も読み返す。宿題の合間の休憩、授業中も教科書に挟んで眺めた。文面を覚えてしまいうくらい、繰り返し。

彼女の手紙からは間違いなく会いたいと、話したいと、遊びたいと、彼は感じた。そうでなければ、手紙を書いてくるはずがないのだ。そしてそういう気持ちは彼も同じだったのだ。

それ以来、彼と彼女は二週間に一度ほど、手紙のやりとりをするようになった。彼女との手紙のやりとりをすることで、彼は以前よりずっと生きやすくなった。

彼は文通をするのが生まれて初めてだった。手紙なんて書いたことがなく、何を書けばいいのかも分からず、彼女の大人びた文章にただ頭を悩ませた。

いざ書き始めてみたはいいが、彼は急に恥ずかしくなった。自分の容易い文章ではなく、彼女に見られるという行為にだ。彼の書いた手紙はもちろん彼女に見られる。それはとても恥ずかしいことのように思えた。

初めて手紙の返事を出したのは、彼女の手紙が届いてから、ひと

つきほど経った後だった。

緋ひげんちひ幻茅紘さまへ

返事が遅れてしまい、申し訳ありません。お手紙ありがとうございました。
います。

こちらはとても過ごしやすい気候です。埼玉県の真夏は四十度近くになりますよね。熱中症にはくれぐれも気を付けてください。茅紘さんがこちらに来られるときは、きつと心地よい気候でしょう。こちらの真夏はそちらほど暑くはないから。

もう一年以上も前になるのですね。僕も中学一年生になりました。勉強は英語が加わって急に難しくなり、部活動は入らずに毎日図書室で様々な本を読んで生活しています。期待に胸が膨らんだ中学校生活は、ぼくには意外とシンプルでつまらないものです。

茅紘さんのことはもちろん覚えています。

音のない静かな雪上をひとり、鼻歌を歌ってくる回る回りながら歩いているのは、とても神秘的だった。

長い黒髪が印象的だったけど、切ってしまったようです。少しもつたいなくなってると思います。でも、きつと似合っているのですよね。僕はどんな格好をしても、すぐに茅紘さんだとわかる気がします。

僕には意外なことがひとつあります。それは茅紘さんが僕を覚えていてくれたことです。あの頃はあまり話をしていなかったような記憶があります。

なぜ、僕のことを覚えていたのでしょうか。僕はとても可哀想で

す。

彼からの手紙を楽しみに待っていた。眠っているときも、食事をしているときも、学校にいるときも、手紙のことばかりを考えていた。

彼からの手紙が届くと、彼女はうれしさのあまりベッドの上を飛び跳ねた。

彼は覚えていた。初めて会ったときの風景や姿、鼻歌を歌っていたことまですべて。彼女にとってこれほどうれしいことは、家族や友達が誕生日を祝ってくれたとき以来だった。

だが、浮かれてばかりはいられなかった。なぜなら、彼の手紙でひどく気になる一文があるからだ。

なぜ、僕のことを覚えていたのでしょうか。僕はとても可哀想です。

彼がなぜこのようなことを書いたのか、見当もつかない。可哀想とは一体どういう意味だろうか。彼女はその晩、眠ることができなかった。

彼女はすぐに手紙を書くことにした。そして時間をかけて長い長い手紙を書いた。

それは彼女が、彼の返事がきてから書こうとしていた内容ばかりで埋め尽くされた。憧れている未来のこと、好きな本や音楽のこと、学校での出来事や最近の話題について。

そして。

夏休みが待ち遠しいことなど、多くを綴った。具体的な内容は覚えていないが、便箋びんせんに十枚ほども書いた。彼の書いた謎の一文については、会ってから聞くことにした。

彼女は彼に伝えたいこと、知ってほしいことがたくさんあったのだ。この手紙を彼が読んでくれれば、きっと同じ気持ちになるのではないかと思った。

夏休み。

彼女は家族とともに、おばあちゃんの暮らす長野県へ車で向かった。窓の外の景色は埼玉県に比べ、空気は爽やかで緑は多く、空も高くて様々な形をした雲を自由に浮かべている。そんな頭上の海は何処までも遠く広い。

彼はどんな顔をして迎えてくれるだろうか。彼女はそんな考えばかりを思い浮かべていた。

長野県へは渋滞もあつたため五時間ほどかかって着いた。古びたバス停小屋も、たくさんの

田園も、彼女はある日と何一つ変わっていないように感じていた。

(一面を覆う雪を除いて)

彼女らはおばあちゃんの家へ歩いていく途中、少し雰囲気は違いますが、見覚えのある男の子を見かけた。

「もしかして……拓磨くん？」

「その声は……茅紘ちゃん……かな？ 久しぶりだね。待ってたよ」

彼はやわらかく優しい笑みで迎えてくれた。

彼と再会してから、夏休みが始まってから十日が経った。彼は彼女のことを？ちい？と、彼女は彼のことを？たつくん？と呼び合うようになった。

彼らは互いを、よく似たもの同士だねと言った。

精神的にも身体的にも、感性やこころも似ていると。まるで兄妹のようだねと言った。彼らはずっと一緒にいたかのように仲良く、毎日楽しい日々を過ごしていた。

だが、その幸せな日々も残り一日に迫っていた。

「ねえ、たつくん。いっしょに写真撮らない？」

「う、うん……そうだね。この空を背景に撮ろうか」

彼は恥ずかしそうに頷いた。デジタルカメラをセルフタイマーに設定して地面に寝かせて置く。転がっていた小石をカメラの下に挟んで角度を調整した。

そして、カメラから少し離れてしゃがみ、覗き込むように二人は顔を近づけて撮った。

眩しく輝く夕陽。陽がおちて空は焼けるような橙へ色が変わっていく。彼らの最後の一日は、あつという間に終わってしまった。

彼女はその日の帰りに彼の手をにぎった。彼はあせる。誰もいないよと彼女は笑った。

「……ちょっとだけ……だからね……ちい……」

「……ありがとう……たつくん……」

いろいろな思いを込めた、ありがとう。

この手のぬくもり、春のあたたかさによく似ている。

離したくない。

ずっと……。

埼玉県は例年通りの猛暑になっていた。

彼女は彼にさっそく手紙を書くことにした。夏らしい便箋に楽しかった毎日のこと、次は冬休みに会おうねと約束も書いた。現像できた写真も封筒に入れ、ポストへ投函した。

彼に会って聞こうと思っていたあのことを、聞き忘れていることに気がついた。だが、そんなことはもうどうでもよかった。彼は可哀想なんかじゃない。そう思ったからだ。

緋幻茅紘さまへ

手紙ありがとう。きれいに写っていてよかった。きれいな空だったよね。この写真に名前をつけたんだ。

恥ずかしいけど、僕とちいのような空だから、？空きみに似ている？
ってタイトル。

どうかな？

次に会えるのは冬休みだね。きっと、初めて会ったときのように、雪がちらちらと降り、白銀の世界が広がっているよ。そのときはふたりだけの足跡を残そうね。そしてまた写真を撮ろうね。

でも、もう冬休みのことを考えているなんて……。まだ三ヶ月くらいもあるのにね。この三ヶ月が僕にはとても長く感じるんだ。ちいにはやく会って言いたいことがあるんだ。

今回は勇気がなくて言えなかったことなんだ。

今度は手を離さないと

そう言って、もし離れたらすぐ？まえて

そしてもっと強く握って

もう、離さない。

もう、離さない。

もう、離せない。

彼から手紙が届いたのは夏休みが終わる頃だった。

彼女は手紙を出すのが遅れて焦っていた。学校の行事で忙しく、手紙を書く暇もなかったのだ。十月の中旬、彼女は手紙の返事を送った。

羽賀崎拓磨さまへ

遅れてごめんなさい。怒っていますか？

言い訳にかなりませんが、学校の行事で忙しかったのです。

ほんとうにごめんなさい。

写真の名前、とても素敵です。とっってもうれしいです。空を通して繋がっているんだなって思います。今日の空は、空たっくんに似ています。

次に撮る写真の背景は雪景色ですね。冬が待ち遠しいです。

私もたっくんに言いたいことがあります。私も勇気がなくて言えませんでした。

かならず言います。だから、まっててね。

一ヶ月後、彼女のもとに彼から「気にしないで」と、それしか書かれていない手紙が届いた。

彼女は彼がきつと怒っているのではないかと思い、すぐに手紙を書いた。

だが、それから手紙の返事は返ってこなかった。

冬休み。

彼らにとつて、あれほど長いと感じていた三ヶ月はすぐに過ぎた。長野県にやって来た彼女は、車から降りた時に靴が新雪に深く埋まり、ぎゅっという柔らかな雪の音がした。

風は止んでいて、空からは無数の雪の粒がゆっくりと、垂直に音もなく落ち続けていた。

彼女はあのときのように、鼻歌を歌いながらくるくると回り始める。雪上には彼女一人だけの足跡が残った。

その日、彼女は父と母に連れられ、彼の家へ向かった。彼の家に彼の姿はなかった。

そして。

彼の両親が泣いている姿だけが視界に入った。彼がどこにいるのか聞いた。彼の両親はただ、泣いていた。

それは、あっけなかった。

まばたきの瞬間、その一瞬に通り過ぎた。

彼女の時間は完全に停止した。

彼は逝った。

羽賀崎拓磨はわずか十二年と数ヶ月という、短い生涯を終えた。

彼女はすべてを理解し、後悔して、涙も出ないまま、時間は動き出した。

巻き戻って……お願い……。

クリスマスイヴなのに。

こんなにも、こんなにも強くお願いしているのに、どうして誰も聞いてくれない。

彼女の想いを世界は踏みにじるように無視した。

彼女は唇を噛んだ。

時間がゆっくりと、でも追いつけないスピードで進んでいく。

たっくんが死んでしまった。

どうして。なんで。

なんで死んだ。

死んだ？

死。

死ぬって、なに？

死ぬって、なんなの……。

辛いこと？ 涙が出ること？ 悲しいこと？

暗いこと？ いなくなること？ 会えないってこと？

わからないよ。ぜんぜんわからないよ……。

だって、涙が出ないんだよ。

葬儀の日。彼の写真は笑顔だった。

どうして笑っているの？

みんな泣いているんだよ？

わたしは 涙も出ない、笑えない。

それは彼女にとって唐突すぎた。嘘のような現実。

彼女は耳を塞いだ。

なにも聞きたくない。なにも知りたくない。なにも

ちい。

彼女は耳を塞いでいた手を離した。すると、足音が聞こえた。その音はまぎれもない、彼の足音だった。

ちい。僕はもうこの世界にはいないけれど、逃げちゃだめだよ。僕がいなくなっても絶望したり、閉じこもってはいけない。大丈夫だよ。すぐに春はくるから。

彼女は思った。こんなにも辛くて痛いなら、彼に出会わなければよかったと。

ちいは本当にそう思っているの？

生きてるってことだけで幸せなことがあるんだ。僕の場合、それはね、ちいに会えたことなんだ。

ちいになにもしてあげられなくてごめん。

ほんとうにごめん。

そして、ありがとう。

彼女の目にあたたかい涙がこぼれだした。拭っても拭ってもとまらない。

彼女はその日、はじめて別れの意味を知った。

第1話 スノードロップ（後書き）

感想をいただければ幸いです。

第2話 ガーデニア（前書き）

ガーデニア 花言葉はとても幸せです。

第2話 ガーデニア

はがきたくま
羽賀崎拓磨さまへ

たいへんご無沙汰ぶさたしております。お元気ですか？

こちら（埼玉県）の初夏も暑いけれど、長野県に比べれば、ずっと過ごしやすいです。電車の中の冷房や、寒すぎるくらいのデパートのおかげです。真夏はそちらとは比べ物にもならないくらい気温が上がります。

溶けてしまいそうな熱いアスファルトも、地表近くの陽炎かげろふも、わたしにはちよつと辛いです。

今年の夏休みはそちらに行けそうです。果てしなく続く高い空も、虫の音や鳥のさえずりも、大きな木陰も、わたしは大好きです。だから早く夏休みにならないかなって、毎日カレンダーを確認しています。

腰くらいまでであった長い髪も耳がでる短くなったから、会ってもたぶんわからないだろうね。

わたしたちが初めて出会ったのは、まだわたしが小学四年生の頃で、拓磨くんは六年生だったよね。

いちめんの雪に覆われた広い田園と、永遠に降り続ける雪は、まるで絵に描いたような冬の一場面のようにでした。

あれからもう一年と四ヶ月が経ちました。

ねえ、拓磨くん。わたしのこと、覚えていますか？

彼にとって、彼女が覚えていたのは予想外だった。

傷つくのはいつも自分じゃなく、他の誰かだった。そのたびに、なぜ、自分じゃないのかと思った。傷つくのは、いつも大切な人だった。

誰も傷つけないまま、人生が終わればいいと思っていた。

明日が今日よりもよくなればいい。そうしたら誰も傷つかない。父も母も、学校の友達も、先生も彼女も、自分自身だって……。

でも、そうとは限らない。

だから、今を精一杯生きる。誰も傷つけないために……。誰も悲しませないために……。

だけど、彼女の泣く姿が妙に脳裏をちらついた。恐怖と絶望がぎりぎりど頭を締め付ける。

そうして、ただ、日々は過ぎていく。

時間の流れはゆるやかに、でも、ほんの一瞬。
刹那的速度で去っていく。
なのに、それなのに……

どうやら僕は……もうすぐ……

死ぬ。

らしい。

彼の身体は病気で蝕まれていた。
余命は七ヶ月。

主治医から宣告されたのは、彼女の手紙が届く少し前だった。

彼は死ぬことを恐れてはいなかった。とくに思い残すことはない。
そう考えていたから。
だが、彼女からの手紙を手にしたとたん、身体の震えと涙が止まらなくなった。

手紙を読むと頭がふらつき、喉からくぐもった声が漏れる。胸が締めつけられるように痛み、吐き気が込み上げた。

そのとき、初めて死ぬことが怖くなった。

彼女は僕のことを覚えていた。あまり話してもいないのに……。

彼にとって、残されている時間はわずかしくなかった。彼女に会えるチャンスは夏休みと冬休みの二回だけ。運が悪ければ一回だけだと考えた。

時間がほしい。

時間が足りない……。

彼は手紙の返事を書いて送った。

彼女から長い長い手紙が届いた。

便箋を十枚ほど使って書かれた内容は、彼にとって幸福であり、不幸でもあった。とくに、彼女の憧れている未来は、彼を暗い闇の絶望的な底に突き落とした。

そのとき彼の世界は、黒い絵の具を流したような、暗い闇に溶けていった。

彼の病気は徐々に悪化しており、主治医の余命宣告も、以前に聞いたときより短くなっていた。

もしかすると、年は越せないかもしれませんが……。。

彼は早く彼女に会って伝えたいこと、知ってほしいことを話したくなった。

夏休み。

彼は後ろから不意に声をかけられた。そこには少女がいた。彼は小学四年生のときの彼女を思い出していた。腰くらいまであった長い髪。

でも、その少女は耳がでるほど短い髪をしていた。それでも、すぐに彼女だと分かった。

「その声は……茅紘ちゃん……かな？ 久しぶりだね。待ってたよ」

彼は涙を零さないように、必死で我慢し、やわらかな笑みを作った。

その日の晩、彼は父と母に、「僕が病気なのは絶対に誰にも言わないで！ 茅紘のご両親と茅紘にはどんなことがあっても言わないで！」と念を押して言った。

彼女と再会して、お互いすぐに惹かれあった。彼女は初めて会ったときと変わらず、元気で明るく、気さくでやさしかった。

彼は毎日が幸せすぎて、夢でも見ているのではないかと怖くなった。

彼らはあだ名で呼び合うようになった。それと同時に、ただの関

係ではなくなつた。友達よりも少し上で、恋人というにはまだ早い。そんな甘酸っぱい関係。

その間にも、彼の病気は進行していた。彼は彼女にばれないように、陽気な笑顔を作り続ける。

彼女にはばれてはいけない。

彼はそう自分に言い聞かせ、一日一日を騙しながら過ごし、罪悪感とともに眠るのだ。

彼女は「あした埼玉に帰る」と言った。

彼女の寂しいと言わんばかりの潤んだ瞳に、彼は自身の顔が映るのを見た。そこには、泣かないように堪えている自分がいた。

十日という時間は、あまりにも早く過ぎてしまい、彼に幸福と不幸を同じだけ与えた。

「きれいな空だね、たっくん」

彼女は感嘆かんだんの声を上げた。

沈んだばかりの太陽が、空を橙に染めている。濃くて、そして透きとおるような橙だ。

遠くには、連なる峰みねのラインがくつきりと見えた。空はそこから始まっている。

「この夕焼けはね、僕が見てきた中で一番すてきだと思える場所なんだ。いつか大切な人に見せてあげたいと思っていただよ」

「思っていた？」

「そう、思っていた。だって、僕の大切な人はちいだから」

しばらく彼らは、立ったまま橙の空を眺めていた。

空が橙から群青に変わる頃、彼女はふいに彼の手を握った。

「ちい！ ちょっと」

「大丈夫、誰もいないよ」

彼女はあどけなく笑った。

「……ちょっとだけ……だからね……ちい……」

「……ありがとう……たっくん……」

彼はその言葉に「ありがとう」と呟いた。

初めてつないだ手はあたたかかった。

それは壊れてしまいそうなくらい儂くて。

だけど、生きていける気がした。

生きていける気がしたんだ。

彼女は埼玉県に帰った。

彼はそれと同じくして喘息が発症した。ストレスからくる過呼吸、発作による呼吸困難を起こし、何度か病院に運ばれたりもした。

彼の病気は確実に悪化していた。取り返しのつかないくらいに…。

数日経って彼女から手紙が届いた。

羽賀崎拓磨さまへ

さっそく手紙を書きました。こちらは例年通りの猛暑です。家から一步も出たくないくらい暑いんです。私が外に出られるようになるのは夕方からです。でないと死んでしまいますよ。熱中症は怖いですから。

つぎにたつくと会えるのは冬休みだね。いつしよに雪合戦したいな。あと、かまくらもつくってみたいです。つくり方教えてくださいね。

そういえば、写真の現像できました。すごくきれいに撮れてたよ。見てね。

彼はこの手紙の返事を書いたあと、病気が急変し、病院に搬送はんそうされた。

彼は入院することになった。病気が進行し過ぎていたのだ。

病院の生活は何もすることがなかった。彼女からの手紙も来ない。身体を動かすとすぐに息ができなくなる。手も足も次第に動かなくなってきた。まるで自分の身体じゃないみたいだ。

こんな生活を毎日送るのか……。

最悪だ。

十月半ば。彼女から手紙が届いた。

羽賀崎拓磨さまへ

遅れてごめんなさい。

怒っていますか？

言い訳にしかありませんが、学校の行事で忙しかったのです。

ほんとうにごめんなさい。

写真の名前、とても素敵です。とってもうれしいです。空を通して繋がっているんだなって思います。今日の空は、空たくんに似ています。

次に撮る写真の背景は雪景色ですね。冬が待ち遠しいです。

私もたっくんに言いたいことがあります。私も勇気がなくて言え

ませんでした。

かならず言います。だから、まってね。

彼は返事を書こうと鉛筆を手に取った。

カラン。

静かな病室に乾いた音が響いた。

なんで……どうして……。

彼は震えた。手に力が入らないのだ。

彼は……鉛筆すら握ることができなかった。

何度も何度も鉛筆を手に取る。それでも握ることができない。

なんでだよ……。ちいが返事を待ってるんだ。ちいは僕が怒ってると思ってるんだ。誤解だよ。怒ってなんかいない。謝らないで……。

お願いだから……謝らないで……。

結局、彼が手紙の返事を書けたのは一カ月後で、震えた文字で、たった六文字のみ書いただけだった。
彼女からすぐに手紙の返事が届いた。

羽賀崎拓磨さまへ

怒っていなくてよかったです。ほっとしました。
あとひとつきで冬休みですね。待ち遠しかったです。

そちらはもう寒いですか？
こちらはまだ少し暖かいです。

今年はいつしよにクリスマスと年越しができますね。
クリスマスプレゼントを交換し合いませんか？
年越しそばも初詣も、餅つきもお年玉も楽しみです。
今年は幸せな一年になりそうです。

彼女はきつと楽しみに待っている。
彼にはそれが痛いくらい分かったし、その確信が彼をどうしようもなく悲しく、苦しくさせた。

窓の外は、灰色の空が広がり、例年よりもかなり早い初雪が、ちらちらと降りはじめた。

彼は目を閉じると、今までの思い出が走馬灯のように駆け巡った。

いっしょに笑ったり、いっしょに泣いたり、怒ったり。

ちいに名前を呼ばれると、もう、胸が痛いだけなんだ。

ちいの名前を呼ぶと、もう、心が張り裂けそうになるだけなんだ。

どうしてあるとき言えなかったんだろう。

好き。

あとちょっとだけ生きていたかったな。

もうちょっとだけ、笑っていたかった。

ちいの傍で……。

僕はちいに出会えてとても幸せです。

彼の最後は、微笑みながら後悔の涙をゆっくりと流した、きれいな顔だった。

第2話 ガーデニア（後書き）

感想をいただければ幸いです。

第3話 アイリス（前書き）

アイリス 花言葉は恋のメッセージ・あなたを大切にします。

第3話 アイリス

羽賀崎拓磨の葬儀から数日後。

空は相変わらず、灰色の厚い雲が広がり、雪がしんと降っている。

緋幻茅紘は窓越しに降り続ける雪を、ただじっと見ていた。

……いつの間に、独りだったんだろう。

彼女はガラスの向こうへと手を伸ばす。

触れられない、冷たさ。

はぁ、と息を吐くと、窓は白く曇った。

彼の、あのあたたかさは何処にもなかった。

午後二時。

彼女は赤いマフラーに白いコート、母から渡された手袋をつけて外に出た。雪は降り止んでいたが、ヒヤツとする冷気が頬を撫でる。

ここ数日間降り続いた雪は、彼女の膝よりも高く積もった。

彼女の目の前に広がる世界は白銀の雪景色。

ふたつの線。

雪をかき集めて、丸く丸く。

ころころ、転がしていく。

ざくざく、と雪を踏み鳴らすふたりの足音。

雪の絨毯に残るふたりの、足跡。

「はあ……冷たあい……」と両手に吐息をかける女の子。そして、その両手を握り締め、温める男の子。

形は歪だが、立派な雪だるまが作られた。泣いているような、笑っているような雪だるま。それから彼らは、手を真っ赤にしたまま、かまくらを作り始めた。

彼らの手足の感覚は、だんだんなくなっているだろう。
なのに、何故か、不思議と笑顔で、楽しそう。

どうせ、溶けて壊れてしまつのに……。

心がイタイ。せつない。なんでだろう？

風に舞い上がる粉雪とともに、彼女は一滴の涙を零した。

本当ならいつしよに作れたのにな……。

彼女はふらふら歩きはじめる。行き先なんてない。

だが、自然と彼の家へと足が向いていた。気がつけば彼の家の前
にいた。なぜ彼の家に来ているのか分からず、おどおどしていると、

「あら、茅紘ちゃん。丁度よかつたわ。寒かつたでしょう？ 今あ

ったかい牛乳用意するから。さあ、上がってちょうだい」

彼の母の言葉に甘えて上がることにした。

彼の家に来るのはこれが三回目だった。はじめて来たのは彼と遊んだときで、二回目は冬休みに入ってすぐだった……。

リビングには彼の写真がたくさん飾られていた。彼の写真はどれも笑顔で、うれしそうに写っていた。彼の描いた絵や取った賞状も飾られている。彼は才能に溢れていたのだ。

たつくんってすごいなあ。

少ししてお菓子とホットミルクが出された。彼女は礼を言って、カップに注がれたホットミルクを口に運んだ。

「いまね、拓磨の部屋を片付けていたのよ。まあ、あまり物は置いてないのだけれどね。よかったら手伝ってくれないかしら？」

「いいですよ。時間、持て余していますから……」

彼の部屋はモノトーンで統一されていた。カーペットは薄いクリームホワイト。本棚も机もベッドもあった。けれど、どこかがらんとしていた。

本棚はスカスカだ。

机の上には砂時計と液体時計がいくつか置かれていた。筆記用具やノート、教科書などはひとつも置かれていない。男の子の部屋は

もつとぐちゃぐちゃしているイメージがあった。

しかし、彼の部屋はすっきりしていた。

「茅紘ちゃん、この机の引き出しの鍵を探してほしいのよ。机の中を片付けたいのに鍵がないのよー」

「わかりました」

机の上から探すことにした。とはいえ、探すところがない。机の下や本棚、ベッドの下など、あらゆる可能性があるところを念入りに探した。

「どこにもないですね……」

「ないわよねー。どこに隠したのかしら？」

「隠してあるんですか？」

「ええ。なんだか、大切なものが中に入っているから、勝手に開けられないように隠したんですって。机の上の手紙に書いてあったのよ。まったく拓磨ったら……」

「あの……その手紙ありますか？」

ええ。と言って、リビングから手紙を持ってきた。

鍵は隠してある。ヒントは、笑顔の裏。

彼の手紙には鍵の在りかを示すヒントが書かれていた。

笑顔の裏？

彼女はリビングに飾ってある写真のことを思い出した。

「たっくんの　いえ、拓磨くんの写真の裏にあるかもしれせん」

「なるほど！　茅紘ちゃんは賢いわねー。ありえるわ、探してみましよう。それと、たっくんでいいわよ。その方がきつと喜ぶわ」

彼の母はともうれしそうだった。

リビングに戻り、飾ってある彼の写真の裏を、ひとつひとつ確認していく。すると、

「ありました！　でも、鍵ではないみたいですよ？」

そこには、小さく折りたたまれているメモ用紙がテープで貼られていた。そのメモ用紙には、こう書かれている。

僕の大切なものは、そう簡単に見ることはできない。次のヒントは、青い涙。

彼女は彼がかくれんぼをしているように感じた。これは、彼からの挑戦状だ。そう思い、俄然やる気が増した。

青い涙って一体なんだろう？

彼女も彼の母も検討がつかなかった。彼女らはまず、青色のした物を探すことにした。

リビングの青い花瓶。

青いティッシュカバー。

青い背表紙をした本。

彼女らは二十分以上も探したが、どこにもそれらしき物は見当たらなかった。まだ探していない彼の部屋に行き、辺りを探索する。彼女は机の上に置かれている、いくつもの砂時計や液体時計を見た。

「もしかして」

その中のひとつ、青色のした液体時計を逆さにした。中の液はまるで、青い涙のように下へ落ちていく。

「やっぱり！ みつけました！」

その底には、小さな文字で、次のヒントが書かれていた。

最後の問題。朝日で影が生まれる。

どづいづこと？

朝日ってことは、日の当たるところにあるってこと？　なんで、朝日限定なんだろう？

そついえば、朝日ってどつちから昇るんだっけ？

東？　西？

山から日が出て、海に沈んでいくから、東だ。

彼女は彼の部屋の窓が東側にあることがわかった。窓の近くを見渡す。とくに何も無い。ごく普通の窓。そして、クリーム色のカーテン。

……カーテン？

彼女はおもむろにカーテンを閉め、その裏を見る。そこには引き出しの鍵が縫い付けてあった。

彼女は錠を借りて、縫ってある糸を切り、鍵を取った。その鍵を机の引き出しの鍵穴に差し込んで回す。

カチャ、と音がして開いた。引き出しを引くと、？おめでどう？の文字が書いてある紙が入っていた。

その下に手紙が何通か入っていて、そのほとんどが彼女の送った手紙だった。一通だけ、緋幻茅紘さまへ、と書いた手紙がある。

彼女はその手紙を手にして、封を切った。

緋幻茅紘さまへ

たぶん、ちいがこの手紙を読むときには、僕はこの世界にいないでしょう。

はじめに謝っておきます。ごめんなさい。

僕は、医者から死ぬことを宣告されていました。

余命は七ヶ月。あまりにも唐突すぎて、実感が湧きませんでした。そのときは涙も出ませんでした。

でも、ちいからの初めての手紙が届いて、「ねえ、拓磨くん。わたしのこと、覚えていますか？」と書かれていたのを読んだときは、涙が止まりませんでした。

僕にとって、予想外の出来事だったのです。

僕が死ぬのはしょうがない。そう、思いました。だから、せめて、誰も悲しませないように生きようと思いました。傷つくのは僕だけでいいと思っていました。

それなのに、ちいは僕を覚えていてしまった。僕は……

僕は……とても可哀想な奴です。

誰も傷つけないと決めたのに、よりによって、一番大切なちいを、

傷つけることになるなんて……。

このとき初めて、死ぬのが怖くなって、病気が治ってほしいと思えました。明日が今日よりも良くなっていればいいと、本当に祈った。

だけど、良くなることはなかった。次第に悪化していることだけが、手に取るように分かった。

ちいの手紙に、未来のことが書いてあって、どんな返事を書けばいいか分からなかった。？いっしょの高校に行きたい？なんて、僕はちいをどれだけ悲しませればいいのだろう……。

叶えてあげられなくて、ごめん。

ちいが夏休みに来たとき、僕は自分が病気だということ、死ぬことを、言おうか言わないか、すごく悩みました。

結局、言わないことにしました。悲しませなくなかったから。泣いた顔が見たくなかったから。でも、本当は言うのが怖かったのです。言うのなら、もっと早くに言うべきだったと後悔しています。でも、怖かった。僕とちいの関係が壊れるんじゃないかって……。

自分勝手に、ごめん。

僕はちいに嘘をつき、騙してきました。毎日、罪悪感に心が押しつぶされそうになりました。何もかも言ってしまうたい。楽になりたい。それなのに言えない。

……僕は臆病者です。

ちいが埼玉県に帰ると言った日、「もう会えないんだな」と思っ
て、涙が出ました。

一緒にあの夕焼け空を見られて良かったです。たぶん、もう見る
ことができないから……。

ちいが帰ったあと、僕は喘息が発症しました。ストレスからくる
過呼吸、発作による呼吸困難を起こし、何度か病院に運ばれたりも
しました。病気は僕を徐々に蝕んでいきました。

そして、とうとう入院することになりました。

入院生活は何もすることがなく、ただ時間だけが過ぎていくので
す。

病院食は美味しくないし、一日に注射を三回もする。就寝時間は
ぴったり九時で、眠ることなんてできなかつた。かといって、身体
を動かせば呼吸困難になって、医者に抑えられ麻酔薬を打たれる。
ここは、地獄でした。

長々と手紙を書いていますね。僕の手が震えてきました。そろそろ終わりにしようとおもいます。ちいにとって嬉しいことはひとつも書いてないね。ごめん。

ここに書くか書かないか、迷ったことがあります。本当は直接会って言いたいことなんだけれど、たぶん、きつと、言えないだろうから書いておきます。

後悔はしたくないので

彼の手紙はそこで終わっていた。彼女は次の便箋を見る。何も書いていない。

？

次の便箋も見るが何も書いていない。そして、最後の便箋を見た。

好きだよ、ちい。

手紙の上にはたばたと涙が落ちていく。涙が止まらない。嗚咽に言葉が止められる。

たっくん！

どうしてあのとき言わなかったんだろう……。
どうして……。
たっくんが好きですって……。。

「私のほづが臆病者だよ……」

彼女は手紙を抱きしめたまま、泣き疲れるまで泣いて眠ってしまった。

トアアトニシナイデ。

悲しいよ。寂しいよ。

もう、逢えないの？

もう、手紙は届かないの？

本当に独りになってしまったの？

ひとりにしないで。

ひとりはいや。

いや。いや。イヤ。嫌。

追伸

ある日、身体がすごく楽になりました。僕はこれが最期の好機だ
と思いました。両親に頼んで、「二時間だけ家に帰らせてほしい」
とお願いしました。僕の主治医は反対していたが、なんとか帰るこ
とを許可してもらいました。

そのときです。この手紙を引き出しに仕舞い、この仕掛けをした
のは。

僕の予想を書いておきます。この仕掛けを解くのはきつと、ちい
でしよう。当たっているのかな？ 答えは分からないけど、そう思
います。

いままでごめんね。そして、ありがとう。

第3話 アイリス（後書き）

感想をいただければ幸いです。

第4話 Last Letter ～ハナミズキ～（前書き）

ハナミズキ 花言葉は私の想いを受けてください・返礼。

第4話 Last Letter 〈ハナミズキ〉

六時半を過ぎた空に、薄い蒼が広がっていた。抜けるように高く、雲はどこにも見えない。

永い冬休みが終わり、埼玉の街は春の空気に彩られていた。

春霞にかすんだ高層ビル。その合間から、太陽の光りが差し込み、茅紘は目を覚ました。

彼女は朝目覚めるたびに、隣に君がいてほしいと願う。優しくった彼の、あの温かなぬくもりが恋しくて。

埼玉に戻ってきたばかりの彼女を、様々な後悔が心の表面に浮き上がってきた。

「僕はとても可哀想です」という言葉。「……ちょっとだけ……だからね……ちい……」という照れた言葉。「気にしないで」の文字。「大丈夫だよ。すぐに春はくるから」という空耳。「ごめん」の言葉。「ありがとう」という最後の言葉。

それから。

「好きだよ、ちい」という告白。

傷つけたのは……わたしの方だ……。

なんでもっと、彼のことを思いやれなかったのだろう。なんでもっと、彼の痛みを知ろうとしなかったのだろう。なんでもっと……大切な言葉を届けられなかったのだろう。

彼女はそれを止めることができなかった。

「ごめん」って言うのは私だよ……。」「ありがとう」「って言うのも私の方だよ……。涙が止まらないのは、同じだよ……。

たっくんがいればよかった。他には何もいらぬ。ただそれだけで良かった。希望だったんだよ。私もとても幸せだった。

たっくんは大切な人で……。たっくんは

わたしの、初めての恋をした人でした。

その晩、彼女は彼の残した最後の手紙を、机の中からそっと取り出した。

便箋から、彼の残り香を嗅ぐように鼻に押し当てる。

すこし読み進めて、一度思い浮かべる。どんな気持ちで書いたのかな、と。

かばんから筆記具を取り出し、便箋を用意した。

たっくんへ

最後に残したお手紙読みました。たっくんの予想通り、わたしが見つけました。(たっくんのお母様にも手伝ってもらいました。) なかなか難しく大変でした。よく思いついたなっておもっています。最後までわたしを楽しませてくれて本当にありがとうね。感謝しきれない気持ちでいっぱいです。

この手紙は、きっと、たっくんに送る最後の手紙になります。読んでくれると思って書いています。

冬休みはゆっくりと、静かに終わりました。雪は消えて、木々に新たな芽が出ています。あとちょっとで桜も咲くでしょう。もう春です。

そして、この手紙は三ヶ月ぶりに書くことになります。だから私は実は、すごく緊張しています。手の震えが止まりません。文字が震えていても気にしないで下さい。たつくんがもしも笑ったら、私は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にするでしょう。なので、笑わないで読んで下さいね。

えっと、なに書けばいいのかな。

あ、そうだ、まずはお礼から。たつくんには伝えられなかった気持ちを書きます。

わたしが初めてたつくんに会ったとき、すぐに好きになりました。一目惚れです。話しかけると、優しい笑顔で相手してくれて嬉しかったです。手紙を書くと、返事が返ってきて本当に嬉しかったです。

たつくんがいなかったら、わたしは幸せの意味に気付けなかったと思います。

だから、お母さんとお父さんに「群馬に引越ししよう」と言いました。結局ムリでしたが……。

それほど、わたしはたつくんを惹かれていました。一緒の中学、高校に行って、手を繋いで登下校して、相合傘なんかもしちゃって、公園で遊んで、お泊り会もして、一緒に大人になりたかったです。

それは私がずっと願っていたことでした。いまはもう叶わないとあきらめました。それでも「たつくんが生きていてくれたらどんなに良かったらう」と思うことが、一日に何度もあるのです。

わがまま、かな？

うーん、次はなにを書こうかな？
それじゃあ、次はお願いを書きます。

私はこれからは、ひとりでちゃんとやっていけるようにしないと
いけません。たつくんにはたくさん迷惑をかけたし、甘えてばかり
でした。でも、そんなことが本当にできるのか、私には自信があり
ません。

それでも、そうしなければいけません。わたしもたつくんも。ひ
とりはすごく不安だから

お願いします。どうか、ひとりでちゃんとやっていきますように。
そうですよね？

それから、最後にこれだけは言っておかなければなりません。私
がたつくんに、あのととき言いたかった言葉。あのととき言えなかった
言葉。

わたしはたつくんのが好きです。

この気持ちは変わることがありませんでした。とても自然に、とても素直に、好きになっていました。同じ気持ちだったらいいなって、両想いならいいなって思っていました。まさか、たっくんも同じ気持ちだったなんて知りませんでした。

でも、私も言うのが怖かったです。この関係が壊れるのではないかと、怖かったのです。

私も、臆病者でした。

たっくんと言えなかった言葉がたくさんあります。

迷惑をかけてごめんなさい。

傷つけてしまったのは、私の方です。

ありがとうございますのも、私の方です。

私はきつと大丈夫です。どんなことがあっても、立派になってみせます。たっくんは隣にいないけれど、それでも私はずっと絶対に好きです。

だから心配しないで下さい。

どうかどうか、私を優しく見守っていて下さい。

彼女は便箋をめくり、最後の一枚に文字を書き込む。

大人になるということが具体的にまだわかりません。

大人になることで、例えば、夏の雲とか、綺麗な夕焼けとか、二人の写真とか、秋の時間とか、春の手紙とか、笑顔とか、声とか、手の感触とか、描いていた未来とか、そういうものをすべて忘れていくとするなら、私は大人になんてなりたくないです。

ずっとこのまま、ずっと一緒に感じていたいです。

先は全く見えない。

けれど、私はいつか、たっくんに会うときまでに

一人で大人になることを約束します。

出会いはあの冬の日。

桜のような雪が舞い散る中。

季節はすぐに移り変わる。

一秒、また一秒と時間は過ぎていく。

流れる時間に手を振るけれど。

さよならなんかじゃない。

そう、これは始まり。

私が大人になるための。

ひとつの 物語り。

もう、はじまっている。

第4話 Last Letter ～ハナミズキ～（後書き）

最後まで読んでくれた皆様、どうもありがとうございます。
感想や意見などをいただければ幸いです。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5953m/>

Last Letter ~花言葉の物語~

2010年10月12日05時27分発行